猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:205部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
滝之原地区:125部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:30部

近代、人為的環境変化による生態系崩壊・獣害深刻化

１９８０年代以降、野生鳥獣による農作物被害が全国的に急増しています。ニホンザルも例外ではなく、この頃からサルによる農作物被害が大きな社会問題になっています。

日本列島に人類が現れたのは約4万年前と考えられていますが、ニホンザルは、それよりも早く、朝鮮半島を経由して既に日本列島に定住していて、人間から見ればニホンザルは先住民となります。また、嗜好する植物性食物は人と大きく重なっていて競合関係にあり、ニホンザルとの軋轢は農耕以前の狩猟採取時代にまで遡ることが出来ます。

古代は、サルの存在感は希薄だった

歴史を振り返ってみて、ニホンザルは人間にとってどういう存在だったのでしょうか。

近年、サルが大都会の街中に現れて、人びとの耳目を驚かせ、あるいはさまざまな被害をもたらしたという報道は、現在ではさほど珍しくありませんが、長い日本の歴史をたどり、江戸時代の獣害や狩猟の記録を見ても、シカやイノシシと比べると、ニホンザルの存在感は稀薄で、ニホンザルは人里離れた土地に棲み、一般には馴染みの薄い動物で近代に至っても、もっぱら山の神の使いとしての知名度の方が一般的には高かったようです。厩猿信仰は、未だにその信仰が残っている地域もあります。

縄文時代にはシカやイノシシなどの大型野生動物は、食料であると同時に畏敬の対象でもあったが、弥生時代に農耕が盛んになると農業被害をもたらす害獣として認識されるようになりました。

棲み分け・共存確立

弥生時代は、狩猟採集活動も行うが稲作農耕が生業活動の中でかなり大きな割合を占めるようになり、焼畑農耕で生産されるヒエやアワ、ソバなどの雑穀は、人にとっては主要な食物であり、栽培された稲や雑穀類を守るためには、害獣の防除活動が不可欠で、防除体制の整備が大きな課題だったのです。現代でも農業は獣害対策なくしては成り立たない産業となっています。

このように紆余曲折を経ながら縄文時代から近年まで主要な野生動物の分布域は、大きく変化することなく、人は先住者であるこれら野生動物と多様なかかわりをもちながら共存を図りながら暮らしてきたのです。

中世の古文書の中には、農作物に害を与えるサルついて触れた資料は殆ど存在しませんが、歴史をたどり振り返えって見ると、約2万年前頃は、寒冷な気候が日本列島全体を覆い、東北地方から中部山岳地帯にかけては亜寒帯針葉樹林で覆われ、西日本も広く冷温帯落葉広葉樹林帯（針・広混合林を含む）によって占められていて常緑広葉樹林はわずかに南九州の海岸沿いに分布するだけで、東北から中部山岳地帯にかけてのニホンザルは、この時期に大きく分布を縮小せざるを得なかった時代と考えられます。

関東平野部では縄文時代から弥生時代の早い時期にニホンザルが平野部から山間部に追い込まれ、少しずつだが着実に人とニホンザルの生息地は分離していったと考えられています。これは弥生時代の主食糧の生産の大半を焼畑や天水田農耕などによって賄っていた関係で、ニホンザルの生息域を農耕に影響のない奥山に追いやったということが考えられ、弥生時代の早期には、ニホンザルとの棲み分けが結果的に確立していたように思われます。また、考古学的見地からでも弥生時代以降、東北地方の遺跡からニホンザルの関連した出土はわずかに1例で、その後はまったく見つかっていないということから、ニホンザルの分布域は人の住む土地から遠く離れる傾向にあり、生息密度もそれほど高くはなかったと思われています。

因みにニホンジカ遺存体の出土は90％以上、イノシシは85％程度認められているのに対して、ニホンザルは僅かに20％程度の出土にすぎません。

生息域の連続性は東北地方北部と関東平野部で特に乏しく、中国地方や九州地方の山間部でも空白（地域的絶滅）地帯が目立っています。東北地方でニホンザルが急速に消滅したのは明治以降に近代式猟銃が普及したことが原因。また、中国地方でのサルの地域的絶滅は、人間による燃料調達のための森林伐採や、有害鳥獣駆除が原因と考えられています。

獣害は人間の活動が原因

縄文・弥生時代以降、ニホンザルなど主要な野生動物の分布域は、大きく変化することなく現在に至っていますが、その歴史の中でニホンザルなど野生動物による農林被害が目立ち始めたのが１９８０年（昭和55年）頃で、理由は人間の暮らしの変化です。イノシシやシカ、サルは昔から生息していて、近年急激に増えたわけではありません。中山間地域の過疎高齢化が言われ始めたのもこの頃で、人間の活動が原因で、里山の荒廃など自然環境が野生動物側に負に働いたからだと考えられています。一端追いやったニホンザルなどのエリアに、人の力が働き人口増加に伴う居住地の確保や食料確保のための圃場の造成などが行われ現代の獣害の根本的な原因となっています。

名張地方でもサルの生息地は、１９８０年頃までは急峻な岩山が続く香落渓谷周辺に特定されていて、その他の地域で目撃することは殆どありませんでした。しかし、香落渓谷が観光地化され観光客が押し寄せるようになってからは、サルは香落渓谷を離れ各地に散っていきました。これが名張AB群のルーツだと思います。このような人為的な環境変化は近代に入り全国的に起こり獣害の深刻化に繋がっています。

因みに、日本の人口は、弥生時代には１００万人ほどで、鎌倉初期では７５０万人、戦国時代では１，７００万人、そして幕末頃には３．２００万人に増加…。その後も人口は増大を続け、２００３年（平成15年）では、１億２．７６０万人と過去最高の人口となっています。しかし、まもなく、わが国は総人口が減少する「人口減少社会」を迎えようとしています。

生息域の連続性は東北地方北部と関東平野部で特に乏しく、中国地方や九州地方の山間部でも空白（地域的絶滅）地帯が目立っています。

東北地方でニホンザルが急速に消滅したのは明治以降に近代式猟銃が普及したことが原因と考えられています。また、中国地方でのサルの地域的絶滅は人間による燃料調達のための森林伐採や現代の有害鳥獣駆除が原因と考えられています。

ニホンザル保護管理温暖化とニホンザル

近年、ニホンザルなど野生鳥獣を取り巻く状況は「保護」が優先した時代から「保護・管理」の時代に入って来ました。また、ニホンザル本来の生息地である温帯林が次々と破壊されているということもあります。

温帯林の盛衰に伴いニホンザルなど野生鳥獣の個体数や分布域は変化してゆきます。

また温暖化が引き起こす環境の変化が、世界で最も北限に棲むニホンザルにどのような影響が出るのか興味深いところです。

狩猟の変遷

獣害対策では狩猟は欠くことの出来ない重要な対策ですが、今後狩猟人口の減少や高齢化が見込まれ、有害鳥獣駆除の未来は暗いです。尚、狩猟の目的は時代とともに変化し、今まで重要な位置を占めていた商業的狩猟の時代はすでに終わり、農林業被害防除のための有害鳥獣駆除などが狩猟の主な目的となっています。

有害鳥獣駆除は鳥獣の保護管理に重要な役割を果たしていますが、生きとし生けるものの命の大切さを認識し、「山からの贈り物」として有効に活用させていただくことが最も大切なことだと思います。

ニホンザル交雑問題

ニホンザルについて近年問題になっているのは、外国から輸入されたニホンザルに近縁なサル（アカゲザル、タイワンザルなど）が群れで生息する場所が国内に少なくとも5箇所はあり、青森県下北半島、伊豆大島、大根島（静岡県南伊豆町）、和歌山県北部に定着し、下北半島と和歌山県では、遺伝子分析によりニホンザルと交雑していることが確認されていて、ニホンザルの遺伝子汚染の恐れが指摘されています。

タイワンザルもニホンザル同様、日本での農業被害が報告されています。

出土したサルの土偶
（文化遺産オンラインより引用）

タイワンザル
尻尾はニホンザルより長く25～35センチ

有害鳥獣駆除の現状

野生鳥獣による農作物被害額は、年間２００億円前後で20年近く推移してきました。近年減少傾向といわれていますが、令和元年度が約１５８億円と依然として高い水準にあります。被害のうち、全体の７割がシカ、イノシシ、サルによるものですが、特に、シカ、イノシシの被害の増加が顕著になっています。

鳥獣被害が深刻化している要因としては、鳥獣の個体数の増加、耕作放棄地の拡大、狩猟者の減少や、高齢化による狩猟圧の低下などが考えられます。

▼シカ駆除数10倍に

しかし、１９９０年と２０１０年の駆除数を比べると、シカは４万２．０００頭から41万５．５００頭と10倍以上に激増。イノシシも７万２００頭から39万５００頭へと５倍以上。このように狩猟者が減っているのに駆除数は激増するという現実があり、狩猟者数と駆除数は、必ずしも相関関係にはないということが分かりました。

▼有害駆除のプロ化

背景には、狩猟規正の緩和や、有害鳥獣駆除への警備会社や害虫駆除企業の参画があります。尚、有害鳥獣地域駆除隊の公募している地域もあります。

また、国の考え方も大きく変わり、以後10年間でシカ、イノシシの生息頭数の半減を目指すと言っていることも背景に含まれています。

▼積極的な被害防除

しかし、何故、駆除数が増えたのに獣害は減少しないのでしょうか。

捕獲による密度の低減には時間がかかり、必ずしも計画通りにいかない場合があります。そのため、捕獲と今まで通りの被害防除を併せて行うことによって効果があがるので、被害防除も積極的に進める必要があります。

▼鹿・猪・サルが悪いわけではない

今、害獣と呼ばれる野生動物には罪の意識などなく、ただ生きようとする行為が、私たち人間や生物多様性、森林環境にとって都合の悪い行為であるが故に駆除されているというのが実情です。かっては、野生鳥獣は人間にとって『有害』な生き物ではありませんでしたが、人間の活動の変化によりに、彼らも変わることを余儀なくされ、結果的に人間の生活圏に餌を求めるようになったのです

人間にとって野生鳥獣は、貴重な資源である反面、社会から防除すべきマイナスの資源でもあったのです。

さらに、野生鳥獣の保全には、一定の人為的な働きかけをしないと、生態系が劣化するということも指摘されています。

今後は、私たち人間がしっかり野生鳥獣の存在を認識し、互いの生活圏を確立することです。所謂（いわゆる）、棲み分け。棲み分けこそが、互いにとっての望ましい社会です。私たち人間は、そのための努力が必要であり、実現に向けて継続して取り組んでいかなくてはなりません。

女性猟師によるシカ解体風景

私たちは、美しく豊かな自然環境を維持し、農林水産業を発展させ、安心して暮らせる生活環境を確保するという大義の下、野生鳥獣の命を奪っています。

現代ある私たちの生活や社会が、野生鳥獣の命と引き換えに成り立っているといっても過言ではありません。駆除個体の処理は、捕獲場所から搬出する労力軽減のため、多くの個体は山林に埋設処分されており、周辺環境への影響が心配されています。

▼捕獲個体の適正処理

現在、駆除個体の処理は、埋設が約７割、焼却が約３割、その他（肥料化処理や産廃処理、自家消費などを含む）が約２割となっていて、資源としての利活用は非常に少なく、今後は捕獲したシカやイノシシは、「食肉」としての資源的利活用が望まれています。

日本で野生鳥獣の肉を食べてきた歴史は長く、縄文時代から常食として鳥獣肉は食されていました。

肉食禁止令は、天武天皇（６７５年）から明治天皇（１８７２年）肉食の解禁まで続いていましたが、庶民の間では肉食が途絶えることなく「薬食い」などと称し食されていました。

例えば明治頃までは、心臓が悪ければ動物の心臓を食べる。また、頭が痛ければサルの頭を食べる、そういうことで悪い部分を直そうということがあったようです。

日本では仏教が伝来した6世紀半ばから、僧侶は肉食が禁じられていました。

平安時代以降は，肉食の禁忌（きんき）が僧侶以外の層にも徐じょに広がっていくが、庶民の中の隅ずみにまでいきわたったのは、ずっと後の世になってからのことで、それまではシカ肉は「紅葉鍋（もみじ）」、イノシシ肉は「牡丹鍋（ぼたん）」など食肉の隠語で呼称され、貴重なタンパク源でもあり庶民の間では、「薬食い」の食材として利用されてきました。鳥獣肉は庶民の間では、栄養価も高く、まさに森からの贈り物だったのです。現在では駆除された有害鳥獣の多くは、焼却や埋設処分されていますが、今後は捕獲鳥獣の命を余すことなく地域資源として利用し、農山村の所得向上につながるよう、有害鳥獣の存在を「マイナス思考」から「プラス思考」に考え直す必要があります。

フリートーク

大分高崎山で雌ザルの“ボス”誕生

コロナ禍の中、開催に賛否両論があった東京オリンピックが、８月８日　１７日間の会期を終えて閉幕しました。このオリンピックを振り返って見ると、日本に限らず世界中で若い選手、特に１０代、２０代の選手の活躍が目立ったオリンピックだったと感じました。なんと13歳の女子中学生の金メダリストがこの大会で誕生しました。日本勢では、特に若い女性の活躍が目立った大会であったと思います。動物の社会でも若いメス猿が、初めてボスになったと世界中で、今話題になっています。私の生まれ故郷の大分県の高崎山自然動物園で1953年の開園以来、初めて、雌ザルの“ボス”が誕生しました。園にはB群（677頭）とC群（362頭）の二つの群れがあり、園が、雌の「ヤケイ」（9歳）人間で言えば２０代が、B群の18代目のトップに立ったと発表しました。母親サルは、これまで人間社会の婦人会のリーダーで、雌サルのボス的な役割をしていましたが、まず母親から婦人会のリーダーを奪い取り、その後高齢化した、雄のボス猿「ナンチュウ」（推定31歳）とけんかして勝ちボスの座を奪いました。戦後７６年目の日本でも、まだまだ村社会や、職場、政治の世界でも男社会が続いていますが、女性の活躍によって１日でも早く、平和な社会を築きたいものです。当然男性の協力も必要ですが。

寄稿：田北　利治さん

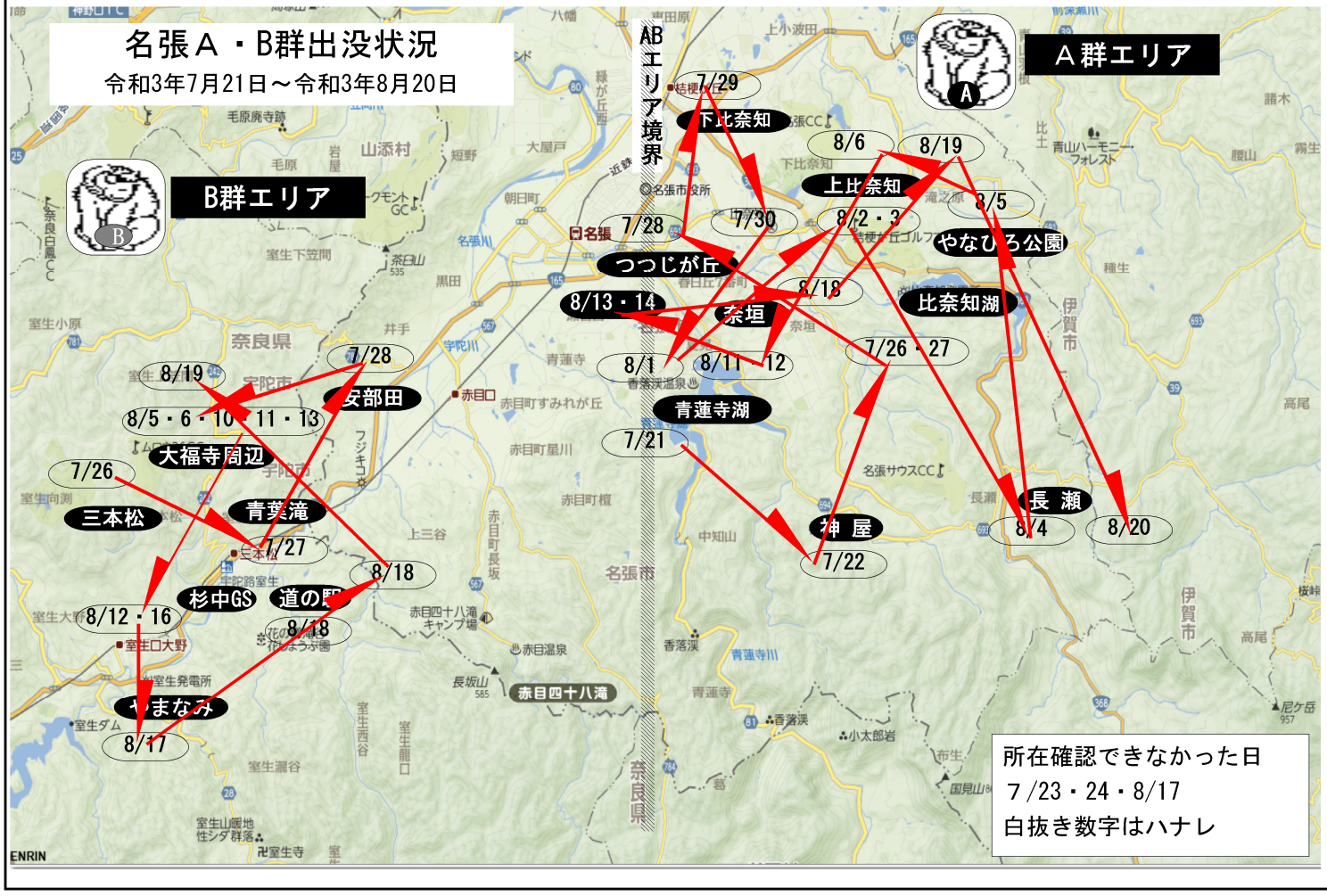
サル出没状況

これから秋になり、冬がやってきます。

サルたちにとって厳しい季節となるため、秋のうちにいっぱい食べて体に栄養を蓄える時期なのです。日本のように季節変化がはっきりしているところでは、利用できる食物も季節により大きく異なり、サルの生活に大きく影響します。

群れは遊動域を均等に利用するのではなくその時期の主要な食物の分布にあわせて遊動します。農作物に依存している群れでは遊動域は小さくなります。

左図に示すとおり、名張Ａ・Ｂ群の遊動域は小さくなっています。

特にＢ群の遊動域は極端に小さくなっています。農作物などの被害は報告されていませんが、かなりの被害が生じていることが想像されます。

また、秋から冬（10月～2月頃）にかけ交尾の期間で、顔と尻の色が鮮明な赤色になります。また、ハナレザルが出没する時期でもあります。